
始まりは胡蝶のように

椋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりは胡蝶のように

【Nコード】

N1440Y

【作者名】

椋

【あらすじ】

現実世界に不満のある所謂いわゆる今時の少女が、人生の転機を求めて見知らぬ街に冒険しに行ったら、何故か最終的には自分でも驚くような世界をまたにかけると大恋愛に？

妖怪物で、人間を食べる話も出てくるかと思われまのでご注意ください！！

prologue (前書き)

軽いプロローグのはずが何故か暗くなっています。すみません。

prologue

ゆめを、みました

ことばにできないほど しあわせで

きおくをけしてしまいたくなるほど ざんこくな

そして

いまもむねがくるしくなるほど こいしいあいつとであう

そんなゆめを……

「ついで、おいつ」

「水鳥^{みどり}ちゃん、先生呼んでるよ?」

つん、と背中を突かれ聞えた友人の声に、あたしは眺めていた窓の外から視線を教室の黒板へと素早く戻す……

「すみません、ついで」

「お前なあ、最近なんか変だぞ?授業中によそ見なんて、そこで居眠りしてる神谷なら分かるが……」

黒板を背に、教卓の前に立つ担任の古川先生はそう言いながら遅刻・居眠り・サボりの常習犯である神谷君に見事なチョーク投げを

披露し、

「なにか、悩みでもあるのか？先生はどんな悩みでも受け入れてやるぞ」

さらにそう言い切ると、無い胸を張り、自信と希望に満ちた瞳をあたしに向ける。

「せんせー、それ受け入れても絶対解決にはなんないと思う、むしろ相談なら親友の私にでしょ？」

あたしを突いて助けてくれた友人、里見ちゃんが鋭く突っ込みをいれ

「おっと、そりゃそうだ！信頼できる友達を持てば人生も楽しくなるからな、先生は友情の邪魔はせんぞ」

「せんせー、まじで何歳？」

呆れた声でそう返す里見ちゃん。

あたしは、この高校に入学してからもう二年。笑顔が絶えないそんなこのクラスが大好きで、大好きで、幸せなのに：：けれどたまに思うことがある。こんな風に女子高生をしているあたしは実は夢の中にいて、何かの拍子に目が覚めたら、本当のあたしはどこか別のところにいるのじゃないかって…。

けれど本当は分かっていた、こんなことを想う理由も、その理由といつかは向き合わなきゃいけないのだということも。

あの、少女の頃に見た夢と……

***** 三年前 *****

あれは、とても寒い冬の始まりの日。

あたしは、猫のように気まぐれで、兎のように寂しがりで、人間の三歳児のように好奇心だけは旺盛で、それでいてすぐに迷子になるような、そんな、ただの女の子だった。

その日もあたしは、思いついたらすぐ行動に移したいマイペースっぷりを見事に発揮して、冒険気分のまま、朝早くに家を飛び出した。外に出ると、いつもは沢山の人が行きかう駅までの道も閑散としていて、ぼうっと立っていたらすぐに息は白く色づき、毛糸の帽

子から飛び出た自慢の福耳は真っ赤に染まって、季節も空気もあたしが冒険に飛び出す邪魔ばかりした。それでも不思議と気持ちは上向きで、出かけると決めたのは突然目覚めた早朝なのに、防寒対策はばっちり、今流行のヒートテックを取り入れた今日の服装に抜かりはない。

「はあ……」

雪が、ちらちらと降り始めた。こうしてじっとしていれば、目に見えるすべてはいずれ消毒されたように真っ白になって、あたしもこの道も見えなくなるのだろうか。なんて、あの頃のあたしは、様々なことに視線を向けていたような気がする。今、友人と歩けばたった数分の駅までの道を行くだけなのに、沢山のモノに興味を惹かれて、その一つひとつに時間を取られて、結局電車に乗れたのは、家を出てから半日も過ぎてからだった。

がたごと、がたごと、と電車に揺られ、窓から見える知らない街を眺める。

「あつ、海」

何駅も、何駅も過ぎてたどり着いたのは、潮の匂いのする風が吹く、小さな町でした。海に向かい歩きだせば、降り積もる新雪がしやり、しやりと音をさせ足元で踏み固められていき、振り返れば……

「真っ白」

しっかりと歩いてきたはずが、振り続ける雪には勝てるはずもなく、あたしの残してきた足跡はどこにも見えない。まるで、短いながらも必死に生きてきたはずが、いまだに自分の足元すらおぼつかない、あたしの人生のようだと、その時のあたしは世界を恨んで

いた。

父は公務員、母は専業主婦、兄は子供の頃から頭が良くて人気者、弟はまだ小さいくせに老人のような貫録を見せ、しかし見た目は幼児と言うギャップからか家族からは可愛がられ、同年代の子供には慕われる。

「……あたしは」

あたしは、マイペースで気まぐれで、兄とは年子のせいであまり騒がれることも無く、愛想もないせい、実の祖母にも可愛くないとそっぽを向かれる始末。成長するにつれ人との違いは顕著に見られるようになり、次第に周りの大人たちも個性的ねえ、とは言っても、褒め言葉は口にしなくなった。

自分でも幼いながらに気づいていなかったわけじゃない。その他大勢が興味を示すような流行には興味もなかったし、大抵の女の子の好きなファッションの話が振られても、何が楽しいのかあたしにはさっぱり理解できない。何度か母のアドバイスを元に所謂いわゆるそれ系の雑誌も購入しては見たが、あたしには合わなかったと言える。そんな物の為に使う時間があるなら、あたしは探検に出かけたり、良く行く古めかしい本屋のリクエストボックスにもっと面白い小説を充実させるように、と長々したた認めた紙を投書したいし、何時だったか見つけたのどかな土手に横になりぽうつと空を眺めたい。

そう、何度も何度も家族からはそのマイペースなところや人とズレた感性を治せと注意はされたし、親族との集まりでは恥をかいたと叱られたりもしたけれど、あたしだって努力はした。人と会うたびに、変わっている、個性的、他にも色々と言われたがそんなことを長い人生の中で人に出会うたび、言葉を交わすたび、口にされたくはないし……正直もう分かったから放っておいて！と何度叫びそうになったか分からない。

拳句の果てに、あたしと言う存在は学校と言う場所では特に嫌な

意味で目立ち、一見平穩に見えた田舎の学校生活も、突然ぼんつと音を立てて浮き彫りになった問題のせいでこのマンモス校に最悪の空気を蔓延させた。何処から流出した情報かは分からないけど、その問題は、あたしが長年ひた隠しにしてきたたった一つの秘密だった。

その問題……ドロドロのイジメが、大人たちの知らないところでいったい何年続いていたかって？そんなの、思い出したくもないくらい、ずっと前から。何時だってそうだった……その個性のせいで、あたしはいつも笑われたり、叱られたり、親にも、兄妹にも、友達にも、奇異の目で見られ続けて。だんだんと、あたしは学校に行かなくなり、もともと亭主閑白過ぎた両親は不仲に、優等生の兄は家の中でどこで手に入れたのか分からない木刀を振り回し、弟は様々なことを諦めたような瞳であたしを見つめた。

……ああ、もう、疲れた。

大きく息を吸って、吐いて、泣いて、叫んで、長年恐れていたたった一つの秘密の発覚は、我が家に大きな亀裂を走らせ、そうしてやっとあたしは気が付いたの。自分の家において、自分の家族と美味しい食事を食べて、暖かいベッドの中で眠っても、もう優しい夢は見れないし、例え恐ろしい夢で真夜中に目を覚まして、たった一言、もう大丈夫だと言って頭を撫でてくれる柔らかな掌も、今のあたしには期待できない。

からっぽだ、と思った。もう疲れ果てて、憎悪さえこの心に留めてはおけないくらい気力も体力も残ってはいなかった。

「ここが、不帰かえらの森」

ちゃんと調べてきた。怪奇現象なんて信じてはいないけど、それでも、これは賭けだ。

「ここから、無事に戻れたら、その時は」

ちゃんとは話そう。今までずっと、我慢していたことを、全部、吐き出してしまおう。

自分は黙っていても迷惑をかけるから、あまり物を欲しがったりしたことはない。だけどね、本当は欲しいものがあるの。お母さんは買い物に出かけると何時だってお兄ちゃんに先に尋ねる、今日は何が食べたい？何か欲しいものは？大抵はそれで決まってしまうてあたしが出る幕はない。弟とは歳が少し離れているため、どちらが可愛いかなど比較もされない。

だけどそれも今日で終わり。あたしは変わるの、どう変わるかはまだまだ計画中だけど、でもこれはその第一歩。

「だいじょうぶ、あたしは、かえってくる」

いつかのテレビで偉い学者さんが一生懸命説明してた。この森はとっても神聖な森で、許可なく侵入した人は森の主の怒りを買ってどこか遠くに飛ばされるって。二度と戻らない者もいれば、数日後や数年後と時期はバラバラでもそのうちひよっこり帰って来る人もいるらしくて、見事戻ったものは幸運を連れて来るって言い伝えもあるらしい。

「だいじょうぶ」

もう一度そう呟いたあたしは、自分を奮い立たせ、何処を見ても真っ白な雪深い森を睨みつけながら、力強く足を踏み出した。

第一話（前書き）

このお話は今のところ少し暗いですが、最終的には明るくラブラブな恋愛物になる予定です。

第一話

森に入り歩き続けて暫く経った頃、あたしの世界は反転した。

「……………きもちわるい」

たった一瞬で全てが変わってしまった。息苦しくて深呼吸をしたいの、息を吸う行為すら億劫で、ふらふらと足元も覚束ない……。先ほどまでは美しく見えた真っ白な雪も、今はただ冷たくて、どうしようもない恐怖があたしを取り囲み、気を抜けばすぐにでも取り込まれそうで……………がくがくと震える足に必死で力を込める。

その時、俯くあたしの視界に人間の足が。

「こんなところで何をしている。人間の小娘が何の用で儂の住処に参ったのだ」

現代の人間にしては古風な話し言葉。そして、あたしは思った……………コレは、人じゃない。

視界に入ったままの足元は、裸足。そして、その足の持ち主が身に着けているのは着物だ。真っ赤な着物の裾がひらひらと、風もないのに揺れている。

「……………のう小娘、この地は古来より儂の住処よ。悪いことは言わぬ、早々に立ち去れ」

穏やかな、それでいて冷たい声があたしを諭す。

「この地へ踏み入った者は、何時もなら例外なく返さぬ……………儂が、

遠い昔にそう決めた。この地へ踏み入り、一時を過ごすとなあ、もう戻れぬのよ。そういう風に、呪いがかかっておる。だがお前は、見たところ今この地へ「迷い込んだ」のだろうか？ならば、儂が帰してやるう。儂は今、とても気分が良いのだ」

ふふ、と男なのか女なのか、それとも性別などは元々存在しないのか。奇妙な音の笑い声が耳にとどき、あたしは全身の産毛が逆立つのを肌で感じ、心底ぞつとした。

「何時もなら、放って置けば腹を空かした眷属たちの大事な糧になるのだが……うむ。小娘、お前は若いな」

あたしが黙ったままなのを良いことに、その生き物は話し続け

「うむ、小娘は若いか。……気が変わった、お前を連れて帰ろう」
なんだ？！何が起きたの？うむうむ言って、それで何が分かったわけ？どうして、

「小娘、お前は煮て食べられるのと、焼いて食べられるのと、…
…そのまま踊り食いされるのでは、どれが望みか」

……どうして食べられることが前提で話が進んで行くのでしょうか？！

「……っ」

あたしは勇気を振り絞り、ぱつと顔を上げた。一言で良い、食べないで下さいと、そう言いたくて……でもそれは到底無理な話だった。なぜなら、その生き物は、その生き物は……

「……水色の、髪？」

それは水色の髪をした物凄い美形の男だった。

信じられない！！こんな生き物がこの世に存在しているなんて！！
！度肝を抜かれるくらい美しい男。これは、べつな意味で人間じゃないだろ？！と、あたしは半ば心を盗まれ、茫然としたまま、どこかわからない彼の住処へ連れ去らわれるのだった。

第二話

しんみりと始まったはずのあたしの冒険は、現在とても！おかしな展開に陥っております！！

「のう、小娘よ。お前は若く、瑞々しく、生きも良い。きっと、とても美味なのだろうなあ」

「……どうして、あの森は神聖なところだった」

ここは例の男の住処らしい。

日本の、と言うよりは中国とかアジアの建築物みたいな重厚感ある平屋の家が竹林に囲まれた森の奥深くに経っているって……おかしくない？！

「ふふっ……ここはお前の言うておる「あの森」ではないのてな。はじめに言つたであろう？ここは、僕の住処であると」

高そうな和室みたいな部屋で男は胡坐をかき、投げ出されたままのあたしを眺めて酒を飲む。

「もうすぐ臭いを嗅ぎつけて眷属共も来よう」

……冗談じゃない！！食われてたまるかっ！あたしは家に帰って、それでっ

「ほう、小娘……血縁の者どもとは上手くいつておらぬのか？」

ふいに、口にされたその言葉は、あたしの心を丸裸にして、傷つ

けた。

「ふふふつ、人とはなんと面白い生き物か。我らはそもそも血の繋がりをもたんに興味すらないが、お前ら人はその繋がりを重要視してゐる。所詮生物は弱肉強食であるう？弱いものは死に、強いものは生きる。繋がりなどと言うものが、どれほどの役に立つのか」

あたしは、こんな何も知らないモノにそんなことを言われる筋合いなんでっ

「何も知らぬ？ふふつなあんにも……知らぬと思つたか？先ほどからお前の言葉が漏れ聞こえて、少々耳障りな程だと言うに」

……っこいつ、あたしの心の声を聞いている？

「こいつ、とは……儂にも名はあるのだがのう？そつだそつだ、小娘、お前の名を聞こうか？」

ふざけてるのか、この男！あたしを食べる癖に、名を聞こうつて？馬鹿にしてっ

「おやおや、怒つたのかい？それは悪いことを言つた」

あたしは投げ出されたまま、半ば畳の上に倒れ込んだ状態でした。身体を起こし、男に掴みかかった。

「っ悪かつた？！あんたは！人の傷口を平気な顔して抉つておいてっ！！煮るだの焼くだの踊り食いだのっ！！拳句の果てに今から食う食糧に名前は？つて！？ふざけんなっ」

男の優美な着物の襟を鷲掴み、奴の飲んでいた酒も足蹴にして、鼻が擦れるかと思うほど近い距離で、あたしは泣きながら叫んだ。

「あたしは幸せになりたくてっ幸せになるためにっ……そのためにきっかけがほしくて！！だって、それぐらいしなきゃ一歩踏み出すのって……凄く物凄く怖いんだからっ」

「ふうむ、幸せ……」

胸臆を掴まれていると言うのに、男は微動だにせず……と言うかまったく意に介さずに何かを考えているようだ。

「小娘、幸せになりたいか？」

「……」

人が泣いてるのにこの男っ！！しかも、幸せになりたいかって？！さっきからそう言ってんじゃんか！！

正直、この男はマイペース過ぎるとあたしは思う。あたしはなかなか止まらない涙を必死に服の袖で拭いながら、こんなやつに食べられる自分の不幸を嘆いていた。……その時、このおかしな空間に侵入者が現れた！！今度は何？！

「すいしゃくさまあ！！おかえりなさいませえ！！」

しっかり締められていたはずの襖の端から、するり、と小さな小さな蛇が……へっ？蛇っ？！

「ふふふ、しちふ。戻ったか」

「はい！七歩蛇やちふしは只今戻りましてございます！すいしゃくさまあ？この小娘は、何故すいしゃくさまのおそばにあるのですか？保存食と言うものでございますかあ？」

十二センチくらいしかない蛇のくせに、何故か朱色の小さな着物を着ていて……人語を話していらっしやる？

「ふむ、この小娘は……お前たちの食糧にと思って持ってきたのだが」

「わあ！みんなしっぱをくねらせて喜びますう！！」

すでに蛇はしっぱをうねうねさせて、こちらを見ている。

「ふふ、しかし……気が変わってな。この娘、儂の伴侶とする」

……はあ？

「なななななんっなんですとあ？！すいしゃくさまの……はははははんりよ」

ほど、そんな音と共に蛇は白目をむき倒れてしまった……。いや、気持ち分かるよ？あたしだって出来るなら気絶したいわっ！！

「なんでっどうしてなにがどうなってそんな流れになったの？！」

あたしは思わず掴んだままだった着物の襟を手放し、その代わりと言ってはなんだが思わず男の髪を引っ張っていた。

「うむ、食べるのはお前に飽きてからでも良いと思うのでな。儂

はお前を幸せにすることに興味がある」

じゃあ飽きたら食べるのか?! あたしはこの男とじゃなくて!
!自分の家族と幸せになりたいんだってのに!!
もうたすけっ……!!

第三話（前書き）

何だか短くてすみません！！

第三話

あのあと何が起きたかって?……それは

「のう、そのように膨れ面をせずこちらへ腰を落ち着けよ」

引つ掴んでいた水色の髪は、ムカつくほど丈夫で一本も抜け落ちたり干切れたりせず、今も目の前のふざけた男の頭部にふさふさ揺れながら健在している。

「あのね、例えあんたが何者でも、これだけは言わせてもらおうわ」

あたしは話しが通じないこの美形の男から距離を取り、現在は部屋の端と端に分かれて座っている状態で叫んでやった。

「あたしはっ絶対に!!!ぜえったいに森を抜けて家に帰るのっ!!!」

大体なんで知らない男に知らない家まで運ばれて、良く分かんないけど喋る小さい蛇に結婚宣言しなきゃいけないわけ?!おかしいでしょう?……おかしいよね?

「ふふ、そう言わずに大人しく伴侶となれば、お前の望む幸せとやらが手に入るのだぞ?む、喋る蛇?……そうじゃったな、しちふを忘れておった」

あたしの心の声をまた性懲りも聞いたらしく、そう言った男は不意に、気絶して倒れたままの小さな蛇を手に取り……食った?!

「ひつ……いいいいいい！今！食べたそれ！！あんたの知り合いだったんじゃないの？！」

ぺろり、と紅く長い舌で唇を舐めた男は言った

「ふふ、儂らの世は弱肉強食であるからの。使えぬものはただ殺すのではなく、食うて自らの糧とするのだ。……ふむ、伴侶となる女子が何も知らぬと言つのもいささか問題が生じそうのだ。説明しておくでしょう」

妖艶に笑い、悪びれもなく俺様発言をかまし、あたしの叫びを完全無視の伴侶呼び！！あく本当にもう！蛇を生で食ったことに引けばいいのか、あたしが伴侶になることをもう決めているらしいことに怒ればいいのか！どっち？！

「儂らを人間が呼ぶとき、皆名はそれぞれだが大抵はこうだ……
「妖怪」そして儂の名は水釈すいしゃくと言つ。好きに呼べ」

はあ？！妖怪！？……まあ何となく納得はできるな。でも名前を呼ぶことは絶対でない！！

第三話（後書き）

一応、妖怪の名前とかは調べつつ書いていますが表現が間違っていたらご一報ください。

第四話

蛇食い妖怪の自己紹介から数分ほどしか経過していない広い室内で、私は何時でも逃げ出せるようにと出入り口に近い方へじりじりと移動を続け、妖怪は先ほどわたしが蹴っ飛ばしたはずの酒をどこからか出してきて、それを片手にこっちを微笑みながら観察している。

「……………」

ああもう、正体不明の男が妖怪だと分かったことよりも、私にとつてはこの水釈？が蛇を生きたまま食べたことの方がよっぽど驚いたし……………正直引いた。こんなところは早く脱出して、家に帰りた……………自分が食われる前に！！

「おや、やっと逃げるのかの？……………それで？逃げられると思うたか？この場所から、そして、この水釈から」

やっと出口の襖に手が届いたその時、ずるり……………と何かが畳を這うような音が聞こえて。

「なっ？！……………へ？しっぽ？」

振り向く時間も与えられないまま、何か長くて太いつるりとしたモノに巻き取られ吊り上げられた。しかもよく見れば、これは巨大な蛇の尾で……………はっと妖怪男の姿を確認すれば。

「ふふっふふふ、驚いたかの？いつもの様に儂が全身変蛇ぜんしんへんじやしてし

まあ、この屋敷が木くずとなってしまうゆえ今は尾だけじゃが、これを見てなお、逃げるのかい？」

何なのよ?!なんで私なの?!

「どうしてっ、伴侶なんて必要そうには見えないけど?!だいたい脅して奥さん貰おうなんてどうかしてるわよ!」

妖怪男の下半身から伸びる蛇の尾に吊るされたまま叫ぶ私。たぶん手加減はされているのだと思うけど、結構お腹が締めつけられて苦しいし、浮遊感がっ!!

「さあなあ……。妖怪でも長く生きていると……。時にそんな気がおきるのかもしれないのぉ」

「おきるのかもって!!馬鹿じゃないの?!そんな気分で奥さんを決めるなっ!の!!っ」

人が吊るされて苦しんでるって言うのにこの妖怪男、許すまじ!そう思っただけなのに、急に私を巻き取ったまま蛇の尾が動き出して気が付けば奴の腕の中……。

「離してっ、この尾を解けてのに!なにっ……ひゅっ」

ひやり、と首筋に当たる何かに驚く暇もなく……。つずくりと痛みが全身を走り抜け、私は気を失った。

ふわふわと、柔らかく暖かな布団の中で目を覚ました私は、一瞬
ここが自宅なのだと勘違いをして、

「おかあ、さん？」

枕もとで動く何かに、そう声をかけた。
けれど、私の耳に届いたのは、聞き知らぬ女性の声で……えっ？

「お目覚めでございますか？ 申し訳ございませんが、私は奥方様
の母君ではございません。私、奥方様の世話役を仰せつかりました
蛇骨婆と申します。どうぞ気軽に蛇五婆とお呼び下さい。夫の蛇五
右衛門もこのお屋敷で水釈様にお仕えさせていたいておりますゆ
え、いずれ御目にかかりますでしょう」

……なに？このお婆さん。今時あまり見かけないような上等の着物を着ているし、右手に青蛇左手に赤蛇を巻きつけて、寝ている私の枕もとに佇んでいる。

正直、反応に困るし……怖い。

「さあさ、身体を起こして御着物に着替えましょう。水釈様がお待ちでございますよ」

「あの、なにが……あのあと何があつたのか」

聞きたいことはいつぱいあるけど、御婆さんを待たせるのも気が引けて言われた通り体を起こし布団から出た私は、戸惑いがちに小さな声で尋ねてみた。

「あのあと、と申されますと……気を失われた後の事でございましょうか？」

起き上がったものの、何をすればいいのか全く分からない私は、寝間着なのだろうと思う白い薄手の着物を着たままお婆さんの方を向き立っている。すると、お婆さんは慣れたもので、自分の背後に置いていた煌びやかな着物を広げ、私の身体に着付けていく……

「ええと、私なんで気を失つたんですか？」

しゅるしゅると、着付けは進み、静かに帯を締めながら……お婆さんは衝撃的な一言を言い放った。

「奥方様が気を失われてしまわれたのは、水釈様が夫婦の印を結ばれたことにより注がれた妖力に、人間のお身体が耐えきれなかつ

たためでしよう。あの日からもう三日が経ちましたが、無事目を覚まされてよかったです」

え……？

「あ、あの……夫婦の印って何なんですか？しかも三日も経ってるんですか?!」

ぼん、と締め終わった着物の帯を押されて、ああ着付けが終わったんだなあ……お婆さんにお礼言った方が良いんじゃない？と脳味噌の片隅で気づいてはいたけど、そんなことしている場合ではない。だって、知らないうちに夫婦の印って?!何それ、夫婦って……どういう事?!

「……夫婦の印、と呼ばれるのは妖怪で言う所謂婚姻いむゑんの儀でございます。妖怪同士の婚姻ではお互いの身体へ印を付け、その結果互いの妖力は溶け合い、心身は繋がり、永い時を共に生きる事が出来ます。人間と妖怪が婚姻の儀を行うとおむこな言う話しはあまり聞いたことがございませんが、人である奥方様には妖力がございませんゆえ水積様へ印を付けることが叶いません。ですので、此度の婚姻の儀では水積様の妖力が一方的に何の力もない奥方様のお身体へと流れ込んだ為、負担がかかったものと考えられます。そして、目覚めるまでの三日をかけ、水積様の妖力は奥方様のお身体へと沁み込んで行き、今はもう……姿形の変わられた貴方様を、人と呼ぶことは出来ません」

そ、んな……。目が覚めたばかりで気が付きもしなかったけど、良く見てみれば確かに……肌の色は透き通るような白へ変わり、髪はお婆さんが綺麗に纏めてくれていたけど驚くほど長く、それもあの男と同じ水色になっていて。

「そんなつ、だって私……奥さんになるって言った覚えもないのに?! ねえお婆さん、戻れますよね? 人間に戻してもらえるんですよ?」

「……お諦め下さいませ。肉体を変えらると言うことは、とても身体へ負担をかける術でございます。我々妖怪であろうとも、その永い生涯に二度術を使うものはいません。ましてや、奥方様は元人間でございます……例え術をかけることが叶ったとしても、元に戻る前にその身体……消滅してしまいますぞ」

「……っ」

お婆さんが私に気を使って、丁寧に優しく説明してくれていることは分かってはいたけど、もう、自分が世界で一番可哀想な生き物のような気がして、ただそこに、膝からぼっきりと折れた木の枝みたいに崩れ落ちて、茫然と畳を見つめぼたりと一滴の涙を流した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1440y/>

始まりは胡蝶のように

2011年11月23日23時51分発行